

令和2年度 第3回 臨時教育委員会 会議録

日 時	令和2年8月7日（金） 12時00分～16時40分
場 所	阪南市商工会館 3階 研修室
出席者	<p>〈教育委員会〉</p> <p>教 育 長 橋 本 眞 一 教育長職務代理者 森 口 賢 二 委 員 八 田 三 紀 委 員 鎌 田 麻美子 委 員 辻 雅 之</p> <p>〈阪南市立義務教育諸学校教科用図書選定委員会〉</p> <p>教科用図書選定委員長 中 山 孝 一 教科用図書選定副委員長 丹 野 恒 教科用図書選定委員 神 藤 直 樹</p> <p>〈事務局（生涯学習部）職員〉</p> <p>学 校 教 育 課 長 丹 野 恒 学校教育課課長代理 濱 野 直 樹</p>
書記	学校教育課課長代理 山 本 朋 美 学校教育課課長代理 石 原 慎 学校教育課課長代理 花 元 英 夫
傍聴者	11名

会議の要旨

(教育長)

令和2年第3回臨時教育委員会を開会する。
署名委員に辻委員を指名する。

◆議決事項第1号「令和3年度使用 義務教育諸学校 教科用図書の採択について」 (学校教育課)

(教育長)

令和3年度使用義務教育諸学校教科用図書の採択について、学校教育課の説明を求める。

(丹野学校教育課長)

議決事項第1号 阪南市立義務教育諸学校教科用図書の採択について、説明する。

まず、小学校の令和3年度使用教科用図書については、令和2年3月27日付け通知『令和3年度使用教科書の採択事務処理について』より、「令和2年度においては、無償措置法第14条の規定に基づき、無償措置法施行規則第6条各号に掲げる場合を除いて、令和元年度と同一の教科書を採択しなければならないこと」とあり、令和2年度採択における調査研究の内容、及び現在小学校で使用している使用実績も踏まえ、別紙1のとおり、後ほど採択を求める。

続いて、中学校の令和3年度使用教科用図書の採択については、選定委員会において調査、研究を行ったので報告を行う。

(教育長)

選定委員会からの報告を求める。

(中山選定委員長)

阪南市教育委員会より阪南市立中学校使用教科用図書選定委員として、委嘱を受け、4回の会議を経て、調査・検討した。

第1回は、令和2年5月18日(月)に開催し、選定にあたりその方法、期間、観点、守秘義務等について確認した。なお、調査員への説明については、コロナウィルス感染症への対策として、5月19日から22日にかけて、事務局が各中学校を訪問し、調査員に採択及び、調査について説明し、調査を開始した。

第2回と第3回は、令和2年7月9日(木)と10日(金)に開催し、各種目の調査員から、調査研究報告を受けた。

第4回は、令和2年7月20日(月)に開催し、各調査員からの調査報告と各学校からの調査研究内容も考慮したうえで、本市の子どもたちにとってどの教科書が望ましいのかということを中心に据えて話し合いを進めた。そして、令和3年度中学

校使用教科用図書全種目において、本日推薦する教科書発行者について最終確認を行った。

次に、調査研究及び検討する際の項目を述べる。調査研究項目は、資料にある観点で、各項目とも共通である。

その結果について、1種目ずつ報告を行う。

なお、報告にあたり教科書発行者名は略称を使用する。

今回の選定委員会では、度々2次元コード等から読み込める、デジタルコンテンツのことが話題にのぼった。全ての発行者が同程度の量、質を備えているわけではなく、デジタルコンテンツについては、今後も内容が変更されたり、追加されたりすることも十分に考えられる。

したがって、今回の採択については、デジタルコンテンツの内容については、「参考にはするが、あくまで教科書の内容をみて判断する」というスタンスで選定委員会も協議したことをご了知いただきたい。

なお、大阪府教育庁に問い合わせたところ、「デジタルコンテンツの内容については文部科学省がチェックをしており、内容によっては文部科学省から発行者に変更を求める」また「デジタルコンテンツの内容を変更した際には、文部科学省にその旨を届け出ることになっている」との回答があった。

なお、報告にあたっては、教科書発行者番号の若い順番に説明を行い、教科書発行者名は、「略称」を使用する。

(教育長)

選定委員から報告を求める。

(選定委員長)

国語から報告を行う。東書、三省堂、教出、光村の4者について報告する。

東書は、挿絵やイラストが分かり易く、「学びの扉」の漫画が身近で単元の目標をとらえやすい、中学生設定のキャラクターを登場させることで、3年間を通して生徒の興味をひく工夫がされていた、などの推薦点があった。ただ、1年生の「詩や歌の創作」や古典教材の難易度が高く、苦手意識を生むかもしれないという課題点がある。

続いて三省堂は、現在中学校で使っている教科書である。話し合い活動が、3年間で系統的に取り組める。また、各学年に「スピーチ」「グループディスカッション」「レポート」などが配置されていて、3年間を見通して学習することができるのが利点。また、著名な俳人が取り上げられていて生徒の興味を引く一方で、3年生の65ページにあるコラムでは、教科書での俳句解説としては、一個人の観点到に偏らないかなどの懸念がある。

続いて教出は、読書活動への啓発として文豪の生涯などが紹介されている、巻末の各単元および漢字の復習は、補充的な学習として自主学習にも活用できる、とい

う推薦点がある。ただ、フォントや色遣い、図や写真の配置や文字の配置などが統一されておらず読みづらいという課題点がある。

最後に光村は、情報化社会を意識した内容で、情報の整理やメディアの特性、情報の信憑性や確かめ方などが教材として掲載されているところが良い点である。ただ、下の方に書かれている注釈の量が多く、情報は豊富であるが全体として読みづらいという課題点がある。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

ただいまの説明を受けて、質問・意見等ないか。

(辻教育委員)

4者それぞれの特徴はよくわかったが、採択に向けて、差はないのか。

(選定委員長)

三省堂、東書の2者と光村、教出の順番である。2番目と3番目の間には開きがある。

(辻教育委員)

それは、使われている教材の差か。もう少し詳しく説明を願う。

(選定委員長)

まず三省堂では、1年生の78ページ「字のない葉書」や2年生の「壁に残された伝言」、3年生の78ページ「希望」という教材は戦争と平和について深く考えることができ、特に「希望」は日本以外の戦争や平和について考えることができる非常に良い教材である。そのほか、防災などの現代的な課題についての教材や、情報・自然科学・国際理解など様々な分野の説明的文章が掲載されているのも良い。各学年に「スピーチ」「グループディスカッション」「レポート」が配置されていて、3年間を見通して学習することができるのも非常に良い。

続いて東書では、1年生の80ページ「碑（いしぶみ）」や2年生の30ページ「字のない葉書」、208ページの「わたしが一番きれいだったとき」、3年生の212ページ「生（う）ましめんかな」など生徒の発達に応じて平和について考えられる教材が掲載されている。そのほか、他教科と関連する教材を積極的に取り上げており、1年生の171ページなど、各学年に「他教科で学ぶ漢字」があるほか、172ページの下にもあるように、マークをつけてわかりやすくしている。「書く」「話す・聞く」の単元では、学習の流れが示され、文章の完成例や対話例などの具体的な例が豊富で子どもたちが理解しやすい工夫がされている。

光村では、1年生の96ページ「大人になれなかった弟たちに」や2年生の106ページ「字のない葉書」、3年生の94ページ「挨拶」など平和について考えられる教材があるが、日本の被害者の側面に偏っているのではないかとの懸念も指摘されている。また、文学的な文章が豊富にあること、1年生の22ページ「シンシユン」は

中学生生活のスタートを切る時期の生徒にふさわしい内容である。そのほか、中高生が興味を持ちそうな作品や話題の作品の一部を紹介し、他にも多くの図書を紹介するコーナーがあるなど、読書意欲をかきたてる工夫がされている。

教出では、1年生の170ページに「子どもの権利」という教材があり、生徒が自分たちの人権について考える機会となる。また、2年生の72ページ「夢を跳ぶ」では障がい者スポーツを通して、人間の尊厳や逆境でもあきらめずに前向きに生きる気持ちを大切にしている内容で良いとの意見があった。一方で、「協力」や「共に生きる」ことを扱う内容が不足していることや、ドイツの人権的内容を扱う教材が1年生と3年生で掲載されており、偏りがあるように感じるなどの課題点もある。また、1年生の20ページ「桜蝶」は中学生になってはじめて触れる文学作品としては、言葉遣いが難しいとの課題もある。

中学生にとって、古典分野の学習は難しく、興味を持ちづらい単元である。そこで、選定委員会としては、中学生の古典学習の入り口にあたる1年生の古典教材に注目し、4者を比較したところ、三省堂、東書に比べ、光村、教出の取り扱いは少ないことが分かった。そこで、三省堂と東書でともに扱われている「竹取物語」を見て比較する。

三省堂では1年生の116ページ、東書では1年生の135ページを見比べると、三省堂の教科書の方が、字が大きく読みやすく、現代語訳の色も見やすく感じられる。また、「竹取物語」の前の114ページに「月を思う心」という教材があり、初めて古典を学ぶ前の学習として、とてもつながりがよい教材である。また、絵巻が大きく提示され、本文と一緒に見るのにも適している。

一方、東書では、物語の途中からページが織り込みになっており、本文も途中で絵巻が挟まれている構図で見づらいという意見があった。直前の学習「鳩と蟻のこと」は、中学生の興味関心を引くかどうかという視点では、三省堂の方が、魅力があるように思う。また、東書では、「浦島太郎」「伊曾保物語」を取り扱っているが、この段階では難しい教材であり、苦手意識を生むことが危惧される。

(教育長)

情報処理能力が現代社会に生きる誰もの課題となっているが、自分の考えや思いを社会生活の中で、しっかりと解りやすく伝えあう力の育成が、義務教育の段階から非常に重要に思う。今回の学習指導要領で、新設された事項に、情報に関する事項という項目があり「情報の整理」ということが、国語科でも取り込まれることになっているが、この「情報の整理」の学習がより充実できると思われる教科書はどれか。

(選定委員長)

今回の改訂で新設された情報の扱い方に関する事項は、急速に情報化が進展する

社会において、「文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにする」ことを目標に新設された。その中の「情報の整理」の学習について比較した場合、最も学習が充実すると思われるのは、三省堂である。

例として、三省堂、東書、光村の3者において、「比較、分類、関連づけ」などの「情報の整理」を学習目標とする単元を挙げて説明する。まず、三省堂1年の142、143 ページは、ページを開けるだけで、これから何を学習するのかの見通しを持つことができる。学習の流れである「課題をつかむ」「多様な考えに触れる」「自分の考えをもつ」「考えを深める」ことがわかりやすく、レイアウトも非常に見やすいため、どの生徒にとってもすぐに学習に臨めるような教科書となっているように思う。実際の学習においても、144、145 ページの資料Aは、目標とする「課題を考える」ことに適した、生徒にとって考えやすい資料であり、146～149 ページの資料Bの文章もわかりやすい見出しで概要がつかみやすく、目標とする「筆者の意見を捉え」等という目標に対し、捉えやすい資料であると考えられる。また、150～154 ページの単元の最後には、学習したことを生かす手段として、学校行事案内のリーフレットを作成するわけだが、題材が生徒にとって身近であり、興味関心をもって意欲的に取り組むことができると考えられる。

次に、東書1年の184 ページは、学習の流れの記載が右端に小さく書かれているだけで具体的な表記がなく、生徒にとってこれから何を学習するのかの見通しが持ちにくい。また184 ページからの文章によって、186 ページのてびき①「筆者があげている編集の例を整理」し、189 ページのてびき②では、提示された資料は、学習課題を達成するためにどこを読めばよいのかをすぐに見つけることが難しい。この場合、教員による「何ページの何行目から何行目までの範囲で考えよう。」などの範囲指定がないと、課題に取り掛かるのが遅くなり、目標達成に至らない生徒が出てしまう可能性がある。190～191 のページ「てびき」は、情報量が多いが、学習することがぎっしりと文章で書かれているために、どの生徒にとっても、何をすることがすぐにわかる記載であるとは言い難い。

最後に、光村1年の118 ページは、学習の流れについては明確に記載されているが、学習のためのページ数が118～120 ページの3 ページと少なく、目標を達成する過程で使用する具体的な資料の記載がないため、生徒にとって十分な理解ができないまま、最終的に自分で案内文を作成することになるのではないかという懸念がある。

従って、「情報の整理」の観点から、最も充実した学習ができると考える教科書は、学習の見通しが持ちやすく、目標とする力をつけるのに適し、生徒自らが意欲的に取り組むことが期待できる三省堂の教科書である。

(森口教育長職務代理者)

国語は、東京書籍と三省堂と、どちらが1位推薦となるか、両者が非常に僅差となっているように思う。学校推薦の1位・2位を見ると、三省堂のほうが、学校推薦で1位又は2位に「必ず」入っており、学校推薦では三省堂のほうがやや有利に見えるが、この点どうか。

(選定委員長)

選定委員会としては、最も推薦するのが三省堂で、次に東書である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、国語について採択する。採択する教科書は、三省堂でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、国語の教科書は三省堂とする。

続いて、書写について報告を求める。

(丹野選定副委員長)

書写について東書、三省堂、教出、光村の4者について報告する。

まず、東書は、各教科とのつながりを重視し、国語科だけでなく社会科とのつながりも紹介されている。また、巻末の資料「書写活用ブック」には多くの情報が掲載され、書写の時間内では活かしきれないという指摘もあった。

続いて三省堂は、硬筆書写が中心で実用的である。また、行書の指導が1年生では40ページまで、2年生では50ページまで、と系統だっているのも指導しやすく感じる。また、楷書と行書の使い分けについてわかりやすい点や、ワークシートが書きやすいという意見もあった。また、教科書サイズがB5版であることもよい。

続いて教出は、硬筆書写の学習を中心に内容が豊富であることは良いが、課題量が多く、単語も難しいという指摘もある。また、巻末126ページからの漢字索引が使いづらい。

最後に光村は、課題や資料が豊富であること、毛筆書写の手本が原寸大で分かり易い、書写ブックが評価の上で使いやすい、といった良い点が多く見受けられる。こちらも教科書サイズがB5版。ただし、31ページの目次を見て、学年の区切りが分かりづらい。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

子どもたちにとって、B5判の方が使いやすいということがわかった。ではほかに質問のある方はいないか。

(森口教育長職務代理者)

姿勢、執筆法、用具の使い方が写真イラスト等を用いて、より理解しやすい教科書はどれか。

(選定副委員長)

各者とも、巻頭に写真やイラスト等を用いて、姿勢と筆記具の持ち方等について掲載している。より多くのページを割いているのは、三省堂。姿勢や大筆の持ち方や鉛筆の持ち方、墨のすりかたや筆の運び方などの丁寧な記載がある。

(辻教育委員)

内容に関して、伝統と文化に関する資料等の内容が充実している教科書はどれか。

(選定副委員長)

各者とも「いろは歌」や「竹取物語」「枕草子」など古典文学からの引用がある。また、各者とも、文字の変遷や文字の歴史などについてのコラムやコーナーがあり、特にどこか偏っている、課題があるという発行者はない。取り扱いの量でみると、用具の歴史や二十四節季などを紹介している東書が多い。

(鎌田教育委員)

子どもたちに興味関心を持たせるための日常生活での書体等を多く取り扱っている教科書はどれか。

(選定副委員長)

各者とも文字文化の豊かさや目的に沿って効果的な文字を工夫するといった学習を取り入れている。光村は、ユニバーサルデザイン書体についてのコラムが掲載されており良い点だと考えるが日常生活と関わるデザインの工夫という点では、文字や書体も含めて、書写だけではなく、美術で取り扱われることが多いため、選定委員会としては、推薦するにあたっての大きなポイントではないという判断である。

(森口教育長職務代理者)

生徒が家庭学習等に活用できるデジタルコンテンツが充実している発行者はどれか。

(選定副委員長)

各者のデジタルコンテンツを確認したところ、三省堂は、基礎編として、姿勢や筆の持ち方などの動画がある。東書、教出、光村は、筆の持ち方などに加え、実際に文字を書く時の動画などがあり、充実している。ただ、デジタルコンテンツへの接続の仕方に差があり、東書、教出は目次のページに2次元コードがあり、そこからすべてのデジタルコンテンツにつながり、選択するという形式になっている。

三省堂と光村はページごとに2次元コードがあり、関連した動画等に接続できるようになっている。現時点における使いやすさと内容の充実度では、光村が良いと考えられるが、デジタルコンテンツについては、今後も内容が変更、追加されることも十分に考えられるので、選定委員会でも「参考にする」というスタンスで捉え

ている。

(教育長)

実際にはデジタルコンテンツの取り扱いは、今後急速に変わる。一人一台のタブレットも入ってくる。今後大きく変わっていく。参考ということもあったが、取り扱いは大きく変わってくることになるだろうと考える。その他質問はないか。

(森口教育長職務代理者)

日常の書式の中のはがきの書き方や送り状の書き方がよくわかる教科書が良いと思うが、さらに、光村の 113 ページにはメールの送り状が記載されているがこれも一つの工夫だと思うが。今は、小包の包み紙にそのまま、あて名を書くこともできる。エアメールなどのあて名書きなど参考としている教科書もよいのでは。

(選定副委員長)

各者とも様々なものを載せていて、巻末資料などに手紙やはがきの書き方、小包などのあて名の書き方など生活場面に活用することができる内容を掲載している。電子メールについては、光村と東書が取り上げており、エアメールの書き方は教出が取り上げている。調査員が注目していたのは、大阪府チャレンジテストなどに出題されたことがある、はがきの書き方で比較検討をおこなった。三省堂と光村には教科書の中に練習用の枠があり、実際に書き込むことができるが、東書と教出にはないという指摘があった。

(教育長)

できないことができるようになることが子どもたちに必要。生活や日常に即した中で、日常でできることを増やすことができる教科書が必要と感じる。4 者それぞれの特徴は聞いたが、採択に向けて、差はないのか。

(選定副委員長)

まず教材については、東書と教出は取り扱っている教材が難しいとの調査員からの指摘があった。また生徒の机で用具を出した状態で教科書を開くことを考えたときに、教科書のサイズは大きな要素であり、それに関しては、B5 判である三省堂と光村の方が上位となる。もう一点大きな注目点は、左利きの生徒への配慮。東書、三省堂、教出では左利きへの配慮が見える。東書の 24 ページ、三省堂の 20 ページ、教出の 20 ページでは、手本がほとんど上に書かれており、左利きの生徒にとっても見やすくなっている。光村の書写ブックの 16 ページや 24 ページでは、左利きの生徒にとっては、手本が手で隠れてしまう配置になっている。調査員も選定委員会もこの点は大きな課題だと考えた。これらの点を考えて、選定委員会としては三省堂、光村、教出、東書の順で推薦したい。

(教育長)

確認するが、選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長)

選定委員会としては、最も推薦する発行者は三省堂である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、書写について採択する。採択する教科書は、三省堂でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、書写の教科書は三省堂とする。

続いて、社会（地理的分野）について報告を求める。

(神藤選定委員)

地理は、東書、教出、帝国、日文の4者について報告する。

まず東書は、思考を整理するための多様な思考ツールが充実していることが挙げられる。また、218、219ページのように、正解のない課題が単元のまとめの学習として配置されているのもよい点である。他にも、多文化社会、労働者の問題、難民問題や植民地問題について複数の記載があることも、人権の視点から良い。

続いて教出は、10ページに「身近なものから見える世界」としてタピオカを題材にしており、生徒の興味を引く教材となっている。また、調査員からは20ページの時差を表した資料が分かり易いと評価されている。一方で、単元まとめページが発展的な学習につながる課題設定がしづらい、といった課題がある。

続いて帝国は、87、89、113、209ページにあるコラム「未来にむけて 共生」で、人権問題などを多角的な視点で捉え、なおかつ適切に説明されている。また、日本の各地方の冒頭に、都道府県を代表する観光地や食べ物のイラスト地図が記載されていて、各地方のイメージがしやすくなっている。しかし、国や都道府県ごとの統計資料のページがなく、用語解説のページがないことが課題点である。

最後に日文は、192、196から199ページの近畿地方の単元で、歴史と関連させた内容が充実している。また、132、150ページにはハザードマップの使い方や内容が記載されている。さらに、大阪万博、オリンピックとパラリンピック、といった、今日的なテーマが紹介されている。一方で、地図が標高毎に色分けされていることで、山地や河川などの表記がわかりづらいという課題がある。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、まず私が質問を行う。今回の学習指導要領の改訂にあたり、中学校社

会科にあつては「世界の諸地域」の学習において、地球規模の課題を主題として取り上げた学習を充実させるとともに、「防災・安全教育」を充実させるとある。

この間、阪南市では、特に小学校において、海をフィールドにした環境学習に取り組んできて、「全国アマモサミット」や、去年は、「G20 大阪サミット」で、世界の首脳が大阪に集まったが、この時にも首脳配偶者のプログラムで、3 小学校 12 人の児童の研究発表を、首脳夫人たちの前でさせていただいたところである。

また、本市では半数の小学校が、今年も、「海洋教育パイオニアスクールプログラム」の研究に取り組んでいる。小学校で環境をテーマに多くの学びを重ねてきた子どもたちが、どんどん中学校に進学している。

中学校に進んで、小学校の時の学習を引き続いていっそう深める、海洋教育をはじめとする環境学習や、環境に深くかかわる「防災・安全教育」に関して、地球規模の環境問題学習をより深く学ぶといった、このような阪南の子どもたちにふさわしい、中学校社会科の教科書はどれだと思ふか。

(選定委員)

本市では、国連が採択した「持続可能な開発目標 SDG s」の推進に市を挙げて取り組んでおり、学校教育においても、「環境教育」、「防災教育」などとも関連付けて学習活動を行っている。そこで、まず各者の SDG s の取り上げ方と環境学習に関わって各者を比較して説明する。

東書の 55 ページでは SDG s を取り上げ、持続可能な社会についての説明があり、139 ページにも「地球的課題」をふり返ろうという教材で、アジア州などの各州の多様な地球的課題と SDG s を結びつけるという発展課題を取り上げている。また、単元の終わりの「もっと地理」というページがあり、環境教育については、水没の危機にあるツバルについて取り上げ、具体的に考えることができる教材になっている。

教出では巻頭の「地理の学習を始めるにあたって」の 4 ページ目に SDG s に関する記載があり、地球的課題と関係づけて考えようとの呼びかけがあるが、各州の最初のページに記載のある「地球的課題」のところには、SDG s に関する記載がない。

帝国は巻頭の表紙裏で SDG s を掲載し、例を取りあげてわかりやすく示している。また、「未来に向けて」や「地域の在り方を考える」というコラムなどで、SDG s に関するテーマを多く扱っている。環境問題に関しても豊富に盛り込まれている。

日文では、教科書の終わりの方の 262 ページで SDG s に触れており、世界の諸地域、日本の諸地域の学習の後に組み入れられている。それまでの学習で地球的課題や社会的課題について取り上げられているが、SDG s との関連は明確に示されていない。ただ、環境教育に関わっては、地球温暖化の原因の一つである森林伐採が一目

でわかるような写真が掲載されている。また、コラムで、さまざまな環境問題にも触れている。

次に「防災・安全教育」については、各者ともしっかりと取りあげているが、日文ではハザードマップの使い方や説明が他者よりも充実しているため、近年頻発している自然災害への対策を生徒たちが考える良い課題設定になっている。

資料が充実しているだけでなく、生徒自身が課題意識をもって自発的に学習することで、より深く学ぶことができる教科書をと考えると、東書と日文の2者を挙げることができると思う。

(教育長)

ハザードマップの使い方について取りあげているのは日文だけか。

(選定委員)

ハザードマップについては、各者とも取りあげているが、日文は大きく取りあげているという認識である。

(教育長)

ハザードマップについては、今まさに各自が向き合う大きな課題であると思う。

(八田教育委員)

様々な情報を取捨選択して自分の身に降りかかる難題を解決していく時代になってきている。そのうえで、社会の教科の特徴として、図や写真といった資料活用の能力を高めることが大切だと考えている。各発行者では資料活用能力をどのように高めようとしているのか。説明してほしい。

(選定委員)

各者とも資料活用についての取り扱いはあるが、東書と日文が充実している。

東書の5ページ、日文の巻頭のVIIページ、帝国の巻頭6ページ、教出の5ページには資料活用などの基礎的スキルを身につけるコーナーの紹介がある。東書と日文の内容が豊富であることが分かると思う。具体的な内容については、東書では61ページや63ページを、日文では41ページや47ページに生徒にわかりやすい解説があり、資料活用能力の向上につながると考えられる。ただ、先ほどの巻頭のコーナー紹介は東書の方が丁寧で、あとで振り返って活用できるようになっていると思う。

(教育長)

4者それぞれの特徴はよくわかったが、採択に向けて、選定委員会としての推薦順と差についてご説明いただきたい。

(選定委員)

選定委員会といたしましては、東書、日文、帝国、教出の順番で推薦する。東書と日文の差は少なく、三番目の帝国の間には少し差がある。

(鎌田教育委員)

東書が日文より上位となる決め手は何か。

(選定委員)

東書と日文の差として、地図資料の見やすさの違いがある。中部地方のように、標高の高低差や河川、平野、山脈の情報を多く掲載する場合、日文の配色では特に河川名の文字が見えづらい。また、東書の136ページと日文の115ページでは学習のまとめに関する充実度が違う。また、東書は思考ツールも取り入れながら生徒が主体的に学習できるようになっている、探求課題も掲載されているという大きなメリットがある。

(教育長)

選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員)

選定委員会として、最も推薦する発行者は東書。次に日文となる。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、社会（地理的分野）について採択する。採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、社会（地理的分野）の教科書は東書とする。

続いて、社会（歴史的分野）について報告を求める。

(選定委員長)

歴史は、東書、教出、帝国、山川、日文、育鵬社、学び舎の7者だが、学び舎については、見本本が届いておらず、調査研究を行っていないので、東書、教出、帝国、山川、日文、育鵬社の6者について報告する。

まず東書は、26ページの西洋の文化歴史を丁寧に扱っていることや、「見方考え方」、「スキルアップ」、「みんなでチャレンジ」などのコーナーが充実しており、より深い考察ができるという良い点がある。ただ、「アヘンを吸う中国人」という版画の紹介があり、中国の人に対して生徒が誤解しないように注意する必要がある。

続いて教出は、各章末にある「歴史を探ろう」のコーナーは生徒の興味を引く内容となっている。また、「独立宣言」の不十分な点やナイティンゲールの偶像化など、歴史の見方に対して一石を投じるような内容の深い資料となっている。ただし、一方で琉球やアイヌに対する記載が、他者に比べ十分ではないという意見もでた。

続いて帝国は、83ページで、中世の老人と子ども、女性の生き方や支えられ方についてわかりやすくまとめられているほか、全編を通して琉球やアイヌ民族、部落

問題といった日本の人権問題のみならず、海外の人種問題にも目を向けているところが評価できる。また、「多面的・多角的に考えてみよう」「タイムトラベル」等のコラムに、写真、絵、グラフの資料がいろいろな視点からバランス良く示されている。さらに、「寄進」「モノカルチャー経済」といった、これまで教員の説明で補っていた語句がわかりやすく説明されていることも優れている点である。

続いて山川は、アイヌ、琉球～沖縄問題を丁寧に扱っている一方で、部落問題についての取り上げが少ない。また、「地域からのアプローチ」や「歴史へのアプローチ」のコーナーをはじめ、豊富な資料が用意されているが、全体的に文字が小さめで、中学生にとっては、消化しきることができない量ではないかと考えられる。

続いて日文は、民族、身分、女性差別を細かく取り上げており、全体的に人権問題への配慮がなされている。また、「チャレンジ歴史」、「アクティビティ」のコーナーが発展的学習や興味づけになっている点も良い。ただし、解体新書や米独立宣言に関する記述が他者に比べ不十分に感じ、他者と比べ総ページ数が多い一方で、ページの空白の部分があることも課題である。

続いて育鵬社は、「歴史のターニングポイント」で生徒が考察できる仕掛けがあることや、各時代に活躍した女性に注目したコラム「なでしこ日本史」が良い点として挙がっているが、太平洋戦争や北方領土に関する記述には、日本側の感じ方を中心に表現されているのではないかといった意見があった。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、何かご質問はないか。

(森口教育長職務代理者)

阪南市においても GIGA スクール構想の前倒しもあり、一人一台のタブレット端末を用いた学習が始まる。中学校の歴史の授業においても、当時の社会の様子、人々の生活の様子、あるいは、日本的な文化・芸能の理解においても、視覚的・聴覚的にビジュアルな学習が進められることになり、相当な効果が出てくると思っている。

タブレット端末を用いたインターネット学習により、生徒の興味・関心を高めることに役立つと思われる資料や動画、ワークシートやシミュレーションが充実している教科書はどれか。

(選定委員長)

育鵬社を除く 5 者には、デジタルコンテンツが用意されており、2 次元コードで読み込むことができる。外部サイトへのリンクや教科書の資料をデジタル化したものが中心だが、東書と日文は動画や独自のワークシートなどを掲載しており、生徒の関心を高めることにつながると思われる。ただ、デジタルコンテンツについては、今後も内容が変更されたり、追加されたりすることも十分に考えられるので、選定

委員会でも「参考にする」というスタンスで捉えている。

(教育長)

資料以外のスペースの本文の説明の量は各者によって違うが、そのあたりの確認については、選定委員会で意見は出なかったのか。昔の教科書は資料が少なく、本文がたくさん書いてあるものが多かった。教科書会社によって、昔は本文の量に差が大きかったが、これは議論にはならなかったか。

(選定委員長)

社会科（歴史的分野）の調査員から、それぞれの時代、アイヌ問題や琉球問題について、多岐にわたる報告があがっている。我々はその中で、ピックアップをして報告している。量については、山川は非常に細かい字で情報過多のため、子どもたちに負担が大きいのではないかという話があったが、量そのものについての議論はなかった。

(教育長)

私自身は昔の教科書との違いを考えていた。昔は教科書と資料集があった。昔の教科書は、たくさん内容が書いてあったため、その議論があったのかが気になった。一方、デジタルコンテンツの導入で、大きく授業が変わると思っている。そうなった時に、本文はどうするのか、というような様々な議論が要るのではないかと考える。昔に比べて、だんだん教科書の文字が少なくなっているので、今後は家庭学習などの自学自習をどうしていくかについても考えることが大切だ。そのバランスがこれからまた変わるのかもしれないと思いながら話を聞いていた。

6者それぞれの特徴はよくわかったが、採択に向けて、選定委員会としての推薦順と差についてご説明いただきたい。

(選定委員長)

推薦順として帝国、東書、教出、日文、山川、育鵬社の順番である。帝国、東書と、残り4者の間に開きがある。

(鎌田教育委員)

帝国、東書の良さをもっと詳しく説明願う。

(選定委員長)

社会科、特に歴史の教科書では、人権問題をどのように扱っているかが重要な視点となる。先ほども話したように、帝国は幅広く、そして深く、人権問題を取り扱っている。帝国では、83ページに注目してほしい。中世の子どもたちと高齢者は、お互いへの働きかけを行える親密な関係にあったことや、古代から中世にかけての女性の地位についての記載内容はとても質が高い。他にも蝦夷地に琉球やアイヌ民族のこともしっかりと記載されている。また、社会科では生徒に興味を持たせ、理解を深められる資料の存在も不可欠であり、東書では、西洋の文化歴史を大きく扱

っているのは、生徒の興味関心を引くと思われる。また、屏風絵や文明開化の錦絵が大きく掲載していることで、グループ学習にも適している教材となっている。また東書は、地理のときにもお伝えしたように、Xチャート、Yチャート、ピラミッドストラクチャのように、効果的なまとめ方の事例を紹介しているところが、学習を深く進める助けとなるかと思う。

(八田教育委員)

2位推薦となった東書を1位としている学校もある。帝国と東書の違い、差は、どんなことか。

(選定委員長)

帝国は部落問題に関して非常に質の高い記載内容が随所に見受けられる。91ページから125ページ、163、171、223ページにかけて記載されている。東書にももちろん記載はあるが、比較するとその違いがよくわかる。帝国の91ページと東書の87ページの中世の河原者に関する記載を見てほしい。帝国で扱われている龍安寺の写真は、排水を考慮して奥が低く作られていることや、視覚的に奥行きを感じさせるために塀を低く作っていることが分かるアングルの写真を使用している。また、河原者が当時担っていた役割、役目や文化を認める記載が帝国のほうが多い。また帝国の125ページと東書の117ページの近世の差別された人々に関する記載を比較すると、当時の社会で必要な役割を担っていたことに東書は触れていない。他にも、杉田玄白が著した解体新書についても、当時差別された身分の人々に支えられて創られたものであるということが、東書には載っていない。帝国では丁寧な記載がある。さらに、アメリカの奴隷制を批判した「アンクル・トムの小屋」に関する記載内容も、帝国のほうが、東書よりも丁寧で分かり易い。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、社会（歴史的分野）について採択する。採択する教科書は、帝国でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、社会（歴史的分野）の教科書は帝国とする。

続いて、社会（公民的分野）について報告を求める。

(選定副委員長)

公民は、東書、教出、帝国、日文、自由社、育鵬社の6者について報告する。

まず東書は、巻頭のページに、公民で何を学ぶのか、何のために学ぶのかを示し、

その後「持続可能な社会の実現に向けて、私たちには何ができるのでしょうか」と、問いかける構成がよいという意見があった。また、「ちがいのちがいに」については、考えを深める導入に利用しやすい。他にも、性の多様性やインターネットでの人権侵害など、人権問題に関する記載が豊富である。ただ、挿絵などの情報が多くわかりづらいところもある。

次に教出は、部落差別や LGBT、ヘイトスピーチ、インターネットでの人権侵害、といった多様な人権問題を多く取り上げているところや、各ページの下に、他教科との関連が紹介されており、学びのつながりを意識した構成となっている点が良い点である。一方で、レイアウトに統一感がなく、説明文と図表がわかりにくい、コラムの位置がページごとにバラバラである、文字ばかりのページがあるなどの課題点も指摘されている。

次に帝国は、各ページの配色や挿絵、とりわけ地図と写真がわかりやすく、例えば排他的経済水域の地図は余分な情報がなくシンプルで分かりやすいという評価だった。また、「パン屋を起業しよう」は、これ以降に学ぶ内容の見方・考え方を別の視点で学習できる良い教材である。一方で、部落差別については、近年課題となっているインターネットでの差別の深刻化が触れられていない点や、他者と比べ、資料が少ないという課題点の指摘があった。

次に日文は、表紙の裏で SDG s に触れ、持続可能な社会をめざすことが国際社会共通の目標であることがわかりやすく示されており、教科書全体を貫く問いとして考えられるようになっている。また、用語集や索引は他者にもあるが、「類似用語集」があるのは日文の特徴であり、わかりやすくて良い。また、「アクティビティ」、「公民+α」などのコラムは現代の具体的な諸課題について考えることができ、学習に役立つものが多い。ただし、「部落差別解消推進法」を太字にせず重要語句に指定していない一方で、重要語句にする必要性を感じない語句が太字になっているなど、基準がわかりにくいという指摘があった。

次に自由社については、「もっと知りたい」というコラムは学習を深めるきっかけとなるが、配置が続いているなど扱いが難しいとの意見があった。また、他者に比べ写真やグラフなどの資料が少なく、文字が多いため生徒が関心を持ちにくいのではないかという指摘や、人権課題に関する内容の取扱いが少ないなどの課題がある。

最後に育鵬社は、表紙裏で SDG s を取りあげ、写真とともに説明しているほか、資料や注釈が見やすいといった良い点もあった。ただ、41 ページの日本国憲法制定に関する記述や、43 ページの天皇に関する記述など、説明だけでなく「意見」が加えられているように感じるため、生徒が誤解しかねないとの指摘があった。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、まず私から質問させていただく。

公民分野の学習内容についても、現代社会や経済の学習、法令の学習、政治の授業などでは、選挙のことや、権利・義務のことなど、中学生の多くにとっては、抽象的な内容の学習が多く、興味・関心が湧きにくく、とっつきにくい主題が多くある。この面について、工夫が見られる発行者はどこか。

(選定副委員長)

教育長がおっしゃる通り、公民という教科は中学生にとって難しいため、調査員は資料や説明が生徒にとってわかり易く、自分の生活に近づけて考えることができ、考えを深めていける教科書が望ましいと考えて、調査研究を行ったと報告を受けている。その観点で見たときに、評価が高いのは東書、帝国、日文の3者と考える。

東書はどのページでも資料の部分の背景に色がついており、本文との区別がしやすい。また、学習のポイントとなる事柄や抽象的な事象やわかりにくいことをうまく図に表すなどの工夫があり、生徒が理解しやすい工夫がある。また、各章ごとに「探求課題」が示され、節ごとに「探求のステップ」、小单元ごとに「学習課題」と「チェック」「トライ」が示されており、見通しをもって学習に取り組むことができるうえに、各章の最後に学習をまとめて、探求課題を解決するという流れになっており、振り返りが充実しており、生徒が深く考えることができる構成になっている。

帝国ははじめに報告したように、各ページの配色や挿絵、とりわけ地図と写真がわかりやすく、説明もわかりやすいという評価があった。一方で資料が他者に比べ少ないという指摘もあった。また、各部の前にある「学習の前に」は絵で現代社会に興味を持たせる工夫がされている。章の終わりの振り返りは簡潔で見やすい。コラム「YES NO」や「アクティブ公民」のコーナーでは、自分の意見を理由とともに説明したり、他の人と話し合ったりする活動を設定しており、更に深く学べるようになっている。

日文は抽象的な事象をわかりやすく図にしており、すっきりとしていると評価されている。また、「類似用語集」があり、生徒にもわかりやすく良い。章の終わりには「学習の整理と活用」のページがあり、振り返りに活用しやすいが、その横のシンキングツールの紹介は使いにくいのではないかとの意見があった。また、「アクティビティ」や章終わりの「チャレンジ公民」は学習内容の理解を深め、深く学ぶためのコーナーになっている。

(辻教育委員)

「調べ学習」のことについて聞きたい。今回の教科書検定で、教科書の中に二次元コードがついていて、タブレット端末を用いたインターネット学習により、生徒

の興味・関心を高めることに役立つと思われる資料や動画、ワークシートやシミュレーションが充実して、「調べ学習」にも向いていると思われる教科書はどれか。
(選定副委員長)

東書、教出、帝国、日文の4者には、デジタルコンテンツが用意されており、「2次元コード」で読み込むことができる。歴史と同様に、外部サイトへのリンクや教科書の資料をデジタル化したものが中心で、一部動画や独自のワークシートなどもある。調べ学習に関しては、外部リンクであっても有用だが、どちらにしてもこのデジタルコンテンツだけで事足りる量、それだけでは十分という量ではないため、4者に大きな差はないと考える。なお、冒頭に報告した通り、デジタルコンテンツについては、今後も内容が変更されたり、追加されたりすることも十分に考えられるので、選定委員会でも「参考にする」というスタンスで捉えている。

(教育長)

6者それぞれの特徴はよくわかったが、採択に向けて、選定委員会としての推薦順と差についてご説明いただきたい。

(選定副委員長)

選定委員会の推薦順は東書、日文、帝国、教出、自由社、育鵬社である。東書と、日文以下の残り5者の間に開きがある。

(教育長)

東書が良いという根拠をもう少し説明願いたい。

(選定副委員長)

まず、東書のバランスが良いということが一番の理由である。説明や資料のわかりやすさ、見やすさ、また、人権の取扱いなど、各者に良い点があり、甲乙つけがたい部分はあるが、東書は資料も見やすくする工夫があり、人権問題についても広く触れている。また、各章のはじめに「導入の活動」があり、ここには課題が提示され、選択肢と判断資料を複数示し、必要な情報を整理し選び、グループ学習の形式でまとめていくものとなっている。この導入部分を帝国や日文と比べていく。帝国では、見開きのイラストで興味を引くが、活動としては、選択肢から選ぶだけであり個人で学ぶものとなっている。日文の方は話し合っているマンガ風のイラストがあるが、それぞれの意見の根拠が示されておらず、話し合いとしては深いものではない。さらに、各者の章のまとめや振り返り学習では、帝国は語句や知識の確認に多くの紙面を割いている。東書と日文は、主に「説明しよう」や「理由を述べよう」といった思考につながるまとめになっている。さらに東書は、既習事項を踏まえたさらなる探究活動や話し合い活動が設定されており、主体的・対話的で深い学びの実現が期待できる内容となっている。これらの点から、東書が最も推薦できると判断した。

(教育長)

では、確認となるが、選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(副委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は東書である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、社会（公民的分野）について採択する。採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、社会（公民的分野）の教科書は東書とする。

続いて、地図について報告を求める。

(選定委員)

地図は、東書、帝国の2者について報告する。

東書は、21、22 ページに世界文化遺産が多く掲載されており、生徒の興味をひきやすい内容となっている。また、39、40 ページ、66 ページ、95、96 ページに歴史との関係に関する資料が掲載されており、学習で活用しやすい。さらに、最後のページにある見開きページの日本の領土、排他的経済水域の資料が充実していることも評価できる。

帝国は、本のサイズが大きく、その分、地図中の細かい記載が見やすいことが良い点である。また、149、150 ページに日本の「自然災害・防災」として、防災教育に関わる記載がある。これは授業者としては扱いやすいと調査員から報告を受けている。他にも、大阪湾周辺地図には広域防災拠点が載っており、防災というマークの付いたものが多くあり、防災教育に力を入れていることは高く評価できる。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、ご質問はないか。

(鎌田教育委員)

総合的な学習の時間、学校行事や学級行事等、特別活動の時間、また、社会科以外の他教科の学習の際にも、利用しやすいと思われる地図はどれか。

(選定委員)

帝国では東京都心部の地図が詳しく載っており、修学旅行の取組に活用しやすいという意見があった。大阪、京都、奈良の中心地の地図は、東書にも帝国にも掲載されており、どちらも活用できるように感じられる。社会科以外の教科への活用と

いう点では、両者とも多様な資料を掲載しており、様々な場面で活用できるものと考えられる。

(八田教育委員)

2者それぞれの特徴は聞いたが、採択に向けて差はないのか。

(選定委員)

選定委員会としての推薦順位は、帝国、東書の順となる。ただ、調査員からの報告を踏まえた選定委員会の認識は、帝国は地図自体が見やすくわかりやすい地図の教科書、東書は地図だけでなく多様な資料が載っている教科書、というイメージである。

どちらにもメリットがあると言えるが、授業で使いやすい地図の教科書を選定するならば、見やすくわかり易い地図が掲載されている帝国を推薦すべきだという結論になった。

(教育長)

随分大きさが違うが、大きさの指摘はなかったのか。

(選定委員)

大きさについては、大きい方が見やすいという意見があった。

(教育長)

確認になるが、選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員)

選定委員会として、最も推薦する発行者は帝国である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、地図について採択する。採択する教科書は、帝国でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、地図の教科書は帝国とする。

続いて、数学について報告を求める。

(選定委員長)

数学は、東書、大日本、学図、教出、啓林館、数研、日文の7者について報告する。

まず東書は、「ノート作り方」や「数学マイノート」ではノートづくりのポイントや振り返りの記述例が示されていて良い。また、全国学力・学習状況調査からの出題も豊富であることは、生徒にとっても教員にとってもプラス。一方、1年生の

教科書がいきなり素因数分解から始まっており、累乗が後で出てくるため、配列のまとまりがない点や、章末問題や補充問題が少ないことが課題点として挙がっていた。

大日本は、1年生の280ページに「小学校算数のふり返し」があり、算数から数学へと系統立てて学ぶことができるので良い。また、文字の大きさを1年生と2,3年生で変えており、工夫がみられることもよい点として挙がっていた。しかし、章末にある発展的な問題「力をのばそう」に解説がないなど、まとめの問題に関して、一人で学習を進めることが難しいのではないかとの意見があった。

続いて学図は、各章のまとめに「できるようになったこと」を示すとともに、「さらに学んでみたいこと」を記述する欄が設けられており、章ごとに学習をふり返ることができるのが良い。ただ、問題文や説明文などが、単語のまとまりに関係なく改行されていて、理解しづらい箇所が散見される。また、章末の問題数が少ないという指摘もあった。

続いて教出は、数学的な読み物が充実している点や、数学を生活に利用する場面が多く扱われているのが良い。一方で各章の補充問題や発展的な問題の扱いが少ない点や、余白が少なく、文字が多いため、読みづらい点が課題点である。

続いて啓林館は、教科書の後ろから縦開きで始まる「自分から学ぼう編」が家庭学習用として構成されており、工夫が感じられるが、問題の難易度がやや高く、一人で解くには難しいと感じる生徒もいるのではないか。また、補充的な内容の問題数は充実しているものの、発展的な問題数は少なめであるとの指摘がある。

続いて数研は日常生活と結びつくような題材を多く取り扱っている点や、補充、発展問題が充実していることが良い点である。また、別冊「研究ノート」には、問題解決型の課題が用意されていて、内容も充実している。さらに、1年生の286ページから291ページには1年生の内容と小学校の算数を合わせて振りかえることができるようになっており、つながりが意識しやすい。

最後に日文は、2年生の16ページ、171ページなどのように、間違えやすい問題を紹介し、生徒が陥りがちなポイントを誤答例つきで示しているのがわかりやすい。また、各章に入る前に既習事項の復習ができ、章の扉では、数学を身近にとらえることができる課題の工夫が見られる。ただし、補充問題はやや少なく、別冊の方が使い勝手が良いのではないかという意見があった。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、ご質問はないか。

(辻教育委員)

7者それぞれの特徴は聞かせていただいたが、採択に向けて、差はないのか。

(選定委員長)

数研、日文、啓林館の上位3者と東書、大日本、学図、教出の4者には開きがある。

(辻教育委員)

数研、日文、啓林館の3者それぞれの特徴について、もう少し説明願う。

(選定委員長)

数研については、各章の始まりに復習問題があり、例と問題があるので、教員にとっても生徒にとっても使いやすい。また、各学年の巻末あたりでは、前の学年などでの既習内容と今の学年で学んだことを合わせてふり返られるようになっており、つながりを意識した構成となっている。このように、既習内容の確認を丁寧に行いつつ、章末問題は教科書と別冊とで難易度を変えるなど、どの生徒にも自分に合った問題で学習を進めることができるのが数研の優れている点である。

日文についても、前学年や既習事項とのつながりを重視されているが、そのことを目次に示しているという点では、数研よりもわかりやすいと思われる。また、学習の「めあて」がわかりやすく示されているのもよい点。ただ、時折ページの下の部分にチャレンジ問題の答えや次の課題が書かれており、やや見にくい印象がある。

啓林館は、車いすバスケットや福祉に関わる題材もあり、人権的な配慮がうかがえる。また、「自分から学ぼう編」が問題の質や難易度に工夫がなされているのが良さであると感じるが、別冊にはなっていないことや教科書の向きを変えなければならぬので、使い勝手がよくない面もあるのではないかと感じる。

(辻教育委員)

数研のみに別冊の「探求ノート」がついているが、この評価はどうか。

(選定委員長)

その点は、選定委員からも調査員に質問があったが、探求的な課題だけを別冊としているため、調査員の中では評価は高かった。ただ、使い勝手がいいかどうかは意見が割れた。

(教育長)

探求ノートは初めて今回でできたのか。

(選定委員長)

前はついていなかった。

(教育長)

これは教科書なのか。

(選定委員長)

セットでついているものなので、教科書の一部という取り扱いで問題ないと考え

ている。

(教育長)

タブレット学習の利点は個別最適化が進められるところだと思っている。数学は理解度、習熟度の個人差が大きくなりやすく、早く問題を解き終わる生徒の待ち時間解消や、より深い学習に個別最適に問題を提供できるなど、数学におけるタブレットを用いた学習により効果が期待できる教科書はあるのか。

(選定委員長)

まず、多様な問題を数多く取り揃えていることが、個別の学習に応じた教科書であると考えます。数研、日文、啓林館、大日本あたりは問題数が豊富だが、基礎的な内容、発展的な内容、補充問題、まとめの問題などの種類やバランスの面からみると、数研の評価が高い。また、デジタルコンテンツにおける問題の取扱いを比較すると、一番量が充実しているのは数研で、動画解説はやや少ないものの、リンク集が充実している。そして補充問題を多数そろえているところがその特徴である。啓林館は動画による解説と課題の解答が中心となっており、問題数は少なめ。日文については補充問題を載せず、動画解説やシミュレーションを多数用意している。空間図形やグラフを自分で動かすことができ、可視化できる点において優れたコンテンツであると思う。

(教育長)

デジタルコンテンツについては評価の参考にはするが、評価そのものにはしないということを確認しておきたい。それを除いたとしても数研の評価が高いのか。別冊を外したとしても数研になるのか。そこを含めて上位3者の順位を確認したい。

(選定委員長)

上位3者の推薦順位は1位を数研、2位を日文、3位を啓林館の順に推薦する。

(教育長)

2位推薦の「日文」の教科書について、学校調査においてかなり低い順位にしている学校があるが、ここの分析をどう捉えるといいのか。

(選定委員長)

学校からの報告によると、発展的な問題が少ないという点を課題と考えていると捉えている。従って、別冊も含めて数研が問題量のバランスがとれているということになる。

(教育長)

では、選定委員会としての推薦順位はどうか。

(選定委員長)

選定委員会としては、数研を一番に推薦する。続いて日文である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、数学について採択する。採択する教科書は、数研でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、数学の教科書は数研とする。

続いて、理科について報告を求める。

(選定副委員長)

理科は、東書、大日本、学図、教出、啓林館の5者について報告する。

東書は、各単元の指導時期や内容の関連性をふまえ、生徒の科学的概念の形成に配慮された単元配列になっている。導入部分に、身の回りや日常目にする現象の観察から始めていることや、コラム「つながる科学」「世界につながる科学」などで日常生活や社会との関連を取り扱っており、興味を持ちやすい内容となっているように思う。一方で写真が小さく、インパクトに欠ける部分もあるという調査員の意見もあった。

続いて大日本は、探究の課程を通した学習活動の中で、「比較する、関係づける、条件を制御する、多面的に考える」などの方法を用いて考えられるよう配慮されているところがよい。また、1年生に掲載されている野草図鑑が充実しており、1年生の最初の単元で扱いやすいものとなっている。ただ、考えたことをまとめるためのシートが用意されていないことが課題点として挙がっている。

続いて学図は、各ページの配色が見やすくカラーユニバーサルデザインへの配慮が感じられる。しかし、2年生の科学分野の配列において、他4者は原子から酸化、の順となっているが、学図は酸化から原子の順に扱っており、生徒にはわかりづらい。

続いて教出は、1年生の229ページのように話し合いながら学習をすすめる場面があり、自分の考えを持ち対話する学習の流れを示しているのが良い点。また、「ハローサイエンス」が生徒の興味を引く内容となっている。ただし、発展問題や長文の問題が少ないことが課題点と言える。

続いて啓林館は、図や写真が大きくてわかりやすく、生徒の興味をひくものとなっているほか、「探Qシート」はノートに貼りやすく、仮説を記入する欄を設けて考える力をのばすよう設定している。そして1年生の40、41ページにある透明標本だが、元の姿とともに掲載されており見やすく、掲載数や標本の大きさも他者より優れているという評価。一方、サイエンス資料は巻末にまとめて掲載したほうが良い

という意見もあった。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(八田教育委員)

採択に向けて、5者の中には、差はどれくらいあるのか。

(選定副委員長)

理科の教科書については、調査員説明会においても、選定委員会においても、とても時間をかけて協議をした種目。まず調査員からの報告では、重視したポイントとして「子どもが興味を持てるイラストや写真が掲載されている点を重視した」との話だった。その上で、啓林館の図が大きいことや写真が興味をひく点などを取りあげ説明したが、他者でも取り扱っている写真やコーナーについても、啓林館の良いところとしてのみ挙げられており、選定委員から様々な質問をする中では、他者と比較しての説明がやや不十分な部分があった。そこで、啓林館の良さとしてあげているポイントについて、他者と比較して追加で示すように依頼し、事務局員において、聞き取りを行い、後日改めて、事務局から選定委員に報告した。例えば、「1年生の野草図鑑の掲載については、東書、大日本、教出、啓林館に掲載されているが、大日本のものが充実している」「1年生の透明標本に関しては東書、学図、啓林館に掲載されており、啓林館のものが元の姿と合わせて示されておりインパクトがある。」「3年生の星座早見表は東書と教出にある。」「定着を図る問題については、東書、大日本が易しい問題から難しい問題まであってよい。」など多岐にわたる。

それに加えて、選定委員会でも多くの議論をした。「啓林館は写真が豊富であることが、最大の推薦点なのか。多くの写真を用いているのは確かであるが、逆に写真が大きすぎるという課題があるのではないか。1年生 16、17 ページや 43 ページの写真は苦手な子もいるかもしれない。」という意見や「内容で考えたときには、各者良い点と課題に感じる点がある。平均的な発行者を選んではどうか。」「原子の周期表は特に教えなくてもよいが、生徒は興味がある。比較すると、日常に使われているものがのっていないのは啓林館だけである。」などの意見も出るなど、幅広く各者を比較しながら、様々な点について話し合った。

中でも、生徒が苦手な分野、2年生の「電気・電流」の単元で、特に並列回路と直列回路の違いの学習の部分は生徒にとって理解が難しいため、各者、回路図とともに水路のモデルを用いて説明している部分の検討もした5者を見比べると、非常に似ていると思うが、回路になっているのは東書だけで、最もわかりやすいという話に至った。

これらの議論を経たうえで、最終的には、啓林館ほど図や写真などが大きくはな

いが、適切に配置されており、問題数も適切で、SDGsについてもしっかりと触れられており、巻頭・巻末や単元末、各節の導入部において、身の回りの事象について考えさせる場面を設けることで、興味・関心を高め、主体的に取り組めるように工夫されているなど、バランスの良い東書が良いのではないかと考えた。次いで啓林館と考えている。

(八田教育委員)

その東書は、教科書の形が他者と比べて違う。このことについてはどんな意見があったか。

(選定副委員長)

他の種目でも教科書の大きさは度々、検討の際の議題に挙がる。理科でも教科書の大きさは議論になった。これも比較すると、大日本が縦横ともに最も小さく、東書は大日本よりも縦だけが長く、他3者は大日本よりも横に長いという形である。理科の学習においては、横に長いとやや不便かもしれないが、東書のように縦に長い場合でも、影響は少ないのではないかという意見にまとまった。

(八田教育委員)

2次元コードから読み込めるデジタルコンテンツについては、各出版社で中身が違うように感じる。この点に関して、どのような意見があったのか、教えていただきたい。

(選定副委員長)

2次元コードについては、リンクさせて様々な分野のHPにつないでいるもの、自社作成の動画やシミュレーションが中心のもの、問題や重要語句をまとめたもの、と大きく3種類の傾向がある。参考として述べると、現時点でこれらのデジタルコンテンツが充実しているのは、東書と啓林館と考えている。

東書は、音声入り動画で解説もされているものが多くある。また、シミュレーションにより、様々な状況での変化をとらえる助けとなり、復習などにも活用できるのではないかと思われる。また、分野によっては、他教科ともリンクしており、他教科との学習の関連を確認することができる。

啓林館は、音声入り動画の解説が種類や数も豊富である。また、一問一答方式の確認問題などもあり、復習にも適している。また、NHK for schoolなどの外部の動画へのリンクも、良い点と捉えている。

(教育長)

東書の教科書の形は今回初めて出てきたのか。

(選定副委員長)

縦長になったのは今回が初めてである。

(教育長)

一般的な授業の形態で、中学生が理科の学習をするときに机の上に出しているものは教科書とノートになるのか。

(選定副委員長)

理科の場合、教室で行う場合と理科室で行う場合がある。教室で行う場合は、基本的には教科書、ノートと教員が作成するワークシートがまず考えられる。

(教育長)

では、選定委員会としての推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は東書。続いて啓林館。

(教育長)

特に理科は大変時間をかけて議論に議論を重ねたと聞いたが、昨年も小学校の理科も非常に難しかった記憶がある。結果、東書と結論づいた理由、東書の良さはどう評価したのか。

(選定副委員長)

東書を選んだ理由、良さは一言で言えば、多くの事項のバランスの良さである。啓林館のような大きな写真ではないが、写真や図が適切に見やすく配置されている点や、内容についてもまとまりが良い点、身の回りの事象について考えさせられる場面を設け、生徒が主体的に取り組めるように工夫されている点、他教科との関連を明示している点、SDGsも3年生の310ページなどのコラムが充実している点など、一つ一つを見ると他者にも良い面があるものの、総合的に見ると東書のバランスが良く、やはり総合的に考えた結果、選定委員会としては東書を一番に推薦することと決定した。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、理科について採択する。採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、理科の教科書は東書とする。

続いて、音楽一般について報告を求める。

(選定委員)

音楽一般は、教出、教芸の2者について報告する。

教出は、各教材に音楽の特徴や他者と話し合った内容など、自分の学習内容を記述する箇所がある。ただ、対話的な活動を取り入れてはいるものの、1対1の対話を想定しているように感じる場所が見受けられるところが課題である。

教芸は、学習のねらい、音楽を形作っている要素、ねらいを達成するための活動の流れが、3 学年共有の流れとして指標となっていることが分かり易い。各ページの左上「パートの役割を感じ取って学習しよう」が学習のねらい、その下の豆電球のイラストの下、「音色、リズム、テクスチャ」が「音楽を形作っている要素」、上の二重丸「主旋律と副旋律の役割や…、混声合唱の響きを生かしながら…」のところがねらいを達成するための学習の流れとなっている。また、30 ページに、合唱の学習活動でグループによる対話的な活動を想定しているところも評価できるところである。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(八田教育委員)

音楽の苦手な生徒も楽しく学習できる観点ではどのような意見が出たか。

(選定委員)

教出においては、まず、写真が美しく、生徒の興味関心をひくものとなっている。また、様々な国の音楽を取り扱っていることも評価されている。さらに、楽曲の特徴や話しあった内容などを記述する欄を各所に設けており、自分が学習した内容をふり返ったり、深めたりすることができる。一方、教材の数自体が教芸よりも少ないとの指摘がある。

教芸はまず、表紙がアニメーション風であり、色彩豊かで生徒の興味関心をひくほか、各学年の巻頭に、野村萬斎氏や松任谷由美氏などの言葉があり、伝統芸能や音楽の多様性について興味を促す内容になっているとの評価がある。また、教材に関しては、伝統音楽が学年の発達段階や理解に応じて取り扱われている点や、以前からある良い教材が引き続き用いられている点が良い点としてあがっている。一方、良い教材が豊富であるものの、新しい曲が少ない点が物足りないとの指摘もある。

(八田教育委員)

歌唱だけでなく創作、鑑賞と学びが多岐にわたっている。創作ではCM ソングをつくろうなど楽しい企画もあったが、創作意欲がわく観点からどのような意見があったか。また鑑賞で味わって聴く選曲など2 者にどのように違いが見られたか。

(選定委員)

創作に関する教材は2 者とも各学年で2 つずつ取り扱われている。「CM ソングをつくろう」は教出2・3 年下の24 ページに掲載されており、生徒の興味をひくテーマであるように感じられる。また、その前のページでも「ラーメン」という身近な言葉を使って、リズムやまとまりを捉えて創作をする活動が紹介されている。しかし、音楽のどの要素を活かしているのかがそのページには示されておらず、ページ左端に示されたねらいでは、「まとまりのある表現で工夫しよう」となっており、生

徒は、何をどうすればよいのか理解しにくいと思われる。

一方、教芸の2・3年下の32、33ページは、教科書で扱っている楽曲をベースにしながらリズムアンサンブルを創る活動である。一番上には「課題」がはっきりと示され、左端には音楽の要素が明確になっている。また、イラストや吹き出し等を用いながら、例が複数示され、活動の見通しが立てやすくなっている。生徒にとっては、何をどのように創作するのかがわかりやすく、より音楽を理解しながら、関心を深めていけるものとなっていると考える。

次に鑑賞に関わる教材としては、主となる鑑賞曲はほぼ同じものを取り扱っているが、教出は大きな写真やイラスト等を用いて引き付ける工夫がある。教芸は外国の作品であれば「この頃、日本では…」という情報を入れるなど、多様な視点を提供しているという特徴がある。また、教芸の方が日本の伝統的な音楽を多く取り扱っている。

(教育長)

では、選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員)

選定委員会として、一番に推薦するのは教芸、続いて教出となる。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、音楽一般について採択する。採択する教科書は、教芸でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、音楽一般の教科書は教芸とする。

続いて、音楽器楽について報告を求める。

(選定委員長)

音楽器楽は、教出、教芸の2者について報告する。

まず、教出は、まなびのねらいが各ページに上部に明示されており、学習内容が非常にわかりやすい。また、楽器の奏法などの写真が多く示されているため、生徒にもわかりやすい。そのほか、和楽器で扱っている曲が「さくらさくら」で統一されているのは、楽器の音色の聴き比べが実感できるという点においてよいという意見がある。一方、アーティキュレーションの違いを示した図は違いが分かりにくいという指摘もあった。

続いて教芸は、楽器の奏法や諸外国の音楽文化、打楽器の奏法などがたくさん盛り込まれていることがよい。また、目次がわかりやすく、各ページに記載されてい

る学習のねらいや、そのねらいを達成するための活動の流れが明確であることもよい。また、全体的に学習内容が無理なく取り扱える内容となっているというふうに評価されていた。一方で、一番初めに「アンサンブルセミナー」が配置されており、違和感があるというような意見もあった。

(教育長)

ただ今の報告について、何かご質問はないか。

(八田教育委員)

リコーダー運指表やギター、キーボードコード表にも違いが見られるが、どのような意見が出たのか。

(選定委員長)

リコーダーの運指については、両者とも新出の運指表が示されている。また、サミングの表し方に違いがあるが、どちらも紹介されているため、特に大きな差はない。一方、ギターのコード表については、調査員からの報告では、教芸の方が視覚的にわかりやすいのではないかという報告を受けている。

(八田教育委員)

中学から新たに習うアルトリコーダーが好きになれるかどうかはとても大きいと思う。どちらの教科書もリコーダーについて十分ページを使って説明されていたと思う。選定委員会でどのような意見が出たのか教えてほしい。

(選定委員長)

両者ともアルトリコーダーについては、既習のソプラノリコーダーと合わせて、丁寧に取り扱っており、その点で大きな差があるというような報告はない。ただ、教出はリコーダーの種類を見開き部分で触れているのに対し、教芸はリコーダーのコーナーの最後に掲載しており、こちらのほうが紹介しやすいのではないかが調査員の意見として出ていた。

(辻教育委員)

リコーダーに関してご説明いただいた。そのほかの点では、両者の違いや差はどのような所になるのか。

(選定委員長)

生徒が様々な楽器のことをよく知ることができる教科書かどうか、ということで考えると、教芸のほうがわかりやすく、深く紹介されているため良い。例えば、教芸の「楽器の図鑑」の紹介は、教出には見受けられないのではないか。また、打楽器にしても、教芸と教出では情報量にやや差があるように感じられる。教芸には打楽器の奏法まで写真付きで解説がされている。別の視点で見ると、「オーラリー」という曲が、教芸では息継ぎをすところの音楽記号、ブレスは「v」で描かれている。それに対し、教出ではブレスの所は「'」カンマのような記号となっている。

このような表し方もあるが、一般的には「v」のほうで統一されているほうが分かりやすいのではないかというのが調査員の報告である。その点においても教芸の方が見やすく、扱いやすいのではないかという報告を受けた。

(教育長)

一通り説明を聞いてきたが、他に質問はないか。

では、選定委員会として推薦する発行者はどこになるか。

(選定委員長)

選定委員会として、一番に教芸、続いて教出である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、音楽器楽について採択する。採択する教科書は、教芸でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、音楽器楽の教科書は教芸とする。

続いて、美術について報告を求める。

(選定副委員長)

美術について報告する。美術は、開隆堂、光村、日文の3者である。

まず開隆堂だが、指導要領に示されている「絵画・彫刻」、「デザイン・工芸」の順に構成されており、分野別にまとめられている。また、著作権、肖像権にふれており、美術の授業では必ず紹介すべき事柄を明記しているので、生徒にとっても教員にとってもよい点である。一方で、ポスター制作については、2、3年生の方で扱われており、他者に伝えるときによく使用するツールでもあるため、1年生に掲載してほしかったという意見もあった。

続いて光村はテーマがわかりやすく参考作品も多く掲載されており、ポイントがコンパクトにまとめられ、すっきりして見やすい。また、最後の晩餐の絵だが、前のページにトレーシングペーパーがあり、一点透視図法の指導に役立つことや、美術史年表のあたりに安藤忠雄氏と岡本太郎氏が紹介されており、大阪の芸術に触れながら、生徒の興味を引くものとなっている。ただ、表紙が生徒の興味をひくような有名な作品などの方がよかったという意見もあった。

続いて日文は、1年生の表紙裏の見開きに、ジブリの背景画が掲載されており、生徒の興味をひく。また、絵画、彫刻、デザイン、工芸、鑑賞のそれぞれの分野のページが充実しており、細かくまとめられているという評価。ただし、作品の掲載が多く、ごちゃごちゃした構成や配置のページもあり、レイアウトが良くない部分

もあるという意見もあった。また、大阪の特徴的な建物でもある清掃工場が載っている。「大阪市・八尾市・松原市環境組合舞洲工場」と記載されているが、現在は、「大阪広域環境施設組合舞洲工場」が正しい表記だという意見があった。各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

ただ今の報告について、ご質問はないか。

(鎌田教育委員)

推薦する順位と、それぞれの発行者の相違点をもう少し詳しく説明が欲しい。

(選定副委員長)

光村、開隆堂、日文の順に推薦する。光村と開隆堂にはほとんど差はないが、日文とはやや差がある。

光村と開隆堂を比べさせていただく。光村は1年生の6ページ、開隆堂は1年生の4ページにそれぞれ、図画工作から美術へのステップアップについて述べられているが、光村のほうがより丁寧に説明されているように考えている。続いて、中学校の美術科として学ぶことが示されているが、これも光村のほうがまとまっていて分かり易い説明だと考えている。

(八田教育委員)

光村と開隆堂の間には他にどのような差があるか説明が欲しい。

(選定副委員長)

左ページ上部の「学習の目標」のところを見ると、開隆堂は3観点にもとづいて記載されているのに対し、光村は、3観点は明示していないため、生徒にとっては、評価の観点が明示されている方が良いのではないかという議論となった。ただ、仮に同じ題材や単元であっても、その授業で何をねらいとし、どの点で評価するか、は授業者によって違ってもよいものであり、そのねらいをしっかり持って、生徒に提示したうえで授業をするため、教科書に3観点が明示されている必要はないとの結論に至った。また、文様について、光村ではグループによる話し合い活動を念頭においた発問がなされているのに対し、開隆堂は文様の紹介にとどまっている。また、光村のほうが一つ一つの資料が大きく写されており、また生徒に考えさせる投げかけが開隆堂より多いという評価になった。

(教育長)

選定委員会として推薦する発行者はどこになるか。

(選定副委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は光村である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、美術について採択する。採択する教科書は、光村でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、美術の教科書は光村とする。

続いて、保健体育について報告を求める。

(選定委員)

保健体育は、東書、大日本、大修館、学研の4者について報告する。

まず東書は、目次が見やすく、巻末資料や読み物のページまで掲載されているのが良く、さらに各章の扉に道徳との関連や高校で学習することが記載されており、様々な角度で学びが繋がっていることが分かる点が良い。ただし、自然災害に関する記載が少ないのが課題である。

続いて大日本は、スポーツの移り変わりや技術、学び方について記載されているところは評価できるが、SDGs についての記載がないところが残念との意見があった。

続いて大修館は、巻末の口絵 10-12、「体のつくりと働き」が載っているが、名称だけでなく働きも書かれていて分かり易い。ただし、LGBT に関する記載がないことが課題である。

最後に学研は、自然災害について、写真も内容も充実しており、評価できる。また、アレルギーに関わって、商品の実際の表示パッケージを例示していることや、けがの応急手当としてテーピングの巻き方について書かれているところが、実際の生活を想定した実用的な教材であり良いという意見があった。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(森口教育長職務代理者)

それぞれ、4者の良い点や課題点を聞いたが、4者を比べたときに、どの点で差があるのか聞かせてほしい。

(選定委員)

学研、東書の上位2者と、大日本と大修館の2者にひらきがある。

中学校の保健体育では、性との向き合い方の学習は、性的マイノリティに対する人権学習ともかかわる非常に重要なテーマであり、調査員もそこに注目していた。

学研では、LGBT について 43 ページの章の導入部分で紹介されており、「普通」、「常識」、「みんなも言っている」という声に対し「そうじゃない人もいるかもしれない」という発想を持ってほしいとの呼びかけがある。また、52 ページに「性とどう向き合うか」というタイトルで取り扱っている。「異性への関心」という言葉は使ってい

るものの、性の多様性についての配慮がある。

東書では章末資料として性の多様性に触れており、本編では「異性の尊重と性情報への対処」として取り扱っている。こちらも「異性への関心」との記載があるが、ページの下に章末資料が紹介されている。

大日本では、「思春期の心の変化への対応」で取り扱っている。「異性や自分の体のことが気になる」という表現に対しては「個人差や男女差がある」と触れており、ページ左の「トピックス」にジェンダーに関する記載はあるものの、LGBT や性的マイノリティに関わる記載がない。

大修館では「性への関心と行動」で取り扱っているが、「異性への関心」に関しては「性意識には個人差がある」との表記があり、右に男性、左に女性に対する固定観念についての記載はあるものの、LGBT や性的マイノリティに関わる記載はない。この点においては、大日本、大修館の2者に関しては課題点であると捉えており、学研、東書と差があると考ええる。

(教育長)

今、説明があったが、他に何か質問はないか。

(鎌田教育委員)

先ほど自然災害の扱いについての話があったと思うが、安全に関する教育について体育編や保健編で様々な内容に触れられている。自然災害に対する身の守り方についても、保健体育の役割は大きいと考えられるが、この自然災害等の扱いについて、さらに詳しく、各者の取り扱っている内容を知りたいので、教えてほしい。

(選定委員)

学研では6ページにわたって、自然災害に関わる記載がある。また、災害時のトイレについてのコラムが紹介されている。東書では6ページ分自然災害について取り扱っており、さらに章末資料にも紹介されている。大日本では98ページから103ページに、大修館では106、107ページと116、117ページに自然災害に関する記載があるが、学研、東書の方がより多く取り扱っている。

(教育長)

他に質問がないようなので、選定委員会として推薦する発行者はどれか。

(選定委員)

選定委員会としては、学研を一番に推薦する。次点として東書が続くと考えている。

(教育長)

上位の学研と東書の差は、僅差のように見える。どうして学研のほうがいいのか。決め手を教えて欲しい。

(選定委員)

先ほどの自然災害に関わる記載で学研と東書の2者で内容を比較する。気象情報と取るべき行動についての記載があるが、学研の方が情報量もわかりやすさも優れている。また、災害時の避難行動については、学研ではまとめて掲載されているのに対し、東書では自然災害ごとに分け、「危険」「安全な避難」と一つ一つに記載されている。学研のほうが、具体的な避難行動がより分かり易くなっているように思う。日頃から発生している自然災害に関する学習は、生徒も興味関心が高いのと同時に、生命の危険に直結するため、具体的な情報が豊富であることは重要であると考えており、選定委員会としては学研の方をより推薦したいと考える。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、保健体育について採択する。採択する教科書は、学研でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、保健体育の教科書は学研とする。

続いて、技術について報告を求める。

(選定委員長)

技術は、東書、教図、開隆堂について報告する。

まず東書は、木の断面図など、全体的に写真、図、イラストが多く、他者と比べてとてもわかりやすいのが良い点である。また、安全面について簡潔な文章でまとめられている上に、イラストもありわかりやすいことも評価されている。さらに、「技術の工夫」がページ下の方に掲載されており、生徒の興味関心を引くものとなっているのも特長である。

続いて教図は、説明の文章がとてもコンパクトであり、生徒が押さえておくべきポイントがわかりやすい構成となっていることが良い点である。また、重要語句は青字、資料番号は黄色の背景に黒字と、字の大きさも見やすさも工夫されている。ただし、基本的な技術の習得についての内容を『別冊』にまとめているが、その掲載内容は本編に掲載した方がよりわかりやすいのではないかと、という調査員の意見があった。

続いて開隆堂は、難易度や情報量のバランスが良くイラストの使い方も効果的で、生徒にとってわかりやすくまとまっていると評価されている。しかし、木材の断面図は縦に生えている木をわざわざ横にしている点が、生徒にとってはわかりづらいという指摘があった。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(八田教育委員)

プログラミングがより具体的に学べる教科書はどれか。

(選定委員長)

各者とも、当然プログラミングに関する教材を掲載している。

東書は本編の 218 ページでプログラミングについて学び、巻末の「プログラミング手帳」でも取り扱っている。教図は本編 210 ページからプログラミングソフトを使ったプログラムの作成を取り扱っており、別冊でプログラミング言語をまとめて掲載している。開隆堂は 208 ページでプログラムの構造について学び、実際のプログラミングソフトを使うことに関しては 280 ページからの巻末資料に記載されている。単元の流れの中で学ぶことができ、わかりやすく記載されているのは東書と教図の 2 者ではないかと、調査員からの報告を受けている。

(教育長)

他に、質問はないか。

(森口教育長職務代理者)

木工での製作・生物の育成の中での植物の育て方・電気の作ってみようなどで実践的・体験的な具体的な例が多く掲載されている教科書はどれか。

(選定委員長)

準備物や作業工程などは各者ともに記載があるが、栽培や作品例などが豊富に取り扱われているのは東書である。

(森口教育長職務代理者)

製作などは大事であると思われるが、製作技術、育成技術、コンピュータ操作、プログラミングなど学んだことを社会に生かすための方法等を自分なりに考え、発表できるいわゆるアクティブラーニングの学習方法が示されている教科書はどれか。

(選定委員長)

各者とも各分野の最後に、技術を応用しどう生かしていくのか、社会の発展にどうつなげるのかといったことを考える構成になっているが、生徒が主体的に考えることを促しているのは、東書である。137 ページに生物に関わる学習のまとめのところでは、知識・技能に関わる内容から、考えを深め、生活に生かすという流れでまとめが構成されている。また、その前のページ、135 ページにはこれからの生物育成の技術について考える課題解決的なページがもうけられている。技術を身につけるだけでなく、その技術を使って自ら未来を切り開いていく力の育成につながるよう工夫だと感じた。

(辻教育委員)

選定委員会としての、3者の推薦順位とその理由について、説明を願う。

(選定委員長)

技術については報告したこと以外に、いくつかの点を協議して推薦順位を決定しており、その点を説明する。まずは、教図についてだが、別冊に記載されている内容は、基本的なものでいつでも使えるが、別冊のみで使用することは授業では想定しにくいいため、一冊にまとまっているほうが便利である、というのが調査員の意見である。また、安全面に関する記載に着目して協議を進めた。釘接合の方法について比較する。まずは釘を打ち付けている写真については、東書が大きく映っており、わかりやすい。あとの2者も写真の角度はわかりやすいが、大きく映っていない。また、釘接合の方法については3者とも、釘を打ち込むための下穴をあける作業を接合前の工程に盛り込んでいるが、教図ではその作業をしている様子が写真ではわかりづらい。開隆堂の場合は、きりで下穴をあける場面の写真が、矢印つきで分かりやすく示されてはいるが、接合の場面は1ページめくって見ることになり、若干の不便を感じる。東書の場合は、見開きの2ページの中に説明の文言や写真が納まっている。

これらの点を踏まえ、推薦順位は、1位に東書、2位に教図、3位に開隆堂の順と判断した。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、技術について採択する。採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、技術の教科書は東書とする。

続いて、家庭について報告を求める。

(選定副委員長)

家庭は、東書、教図、開隆堂の3者について報告致す。

まず東書だが、高齢者とのかかわりや金銭の管理に関する記載がよいという意見があった。また、洗濯の取り扱い表示が新旧ともに取り扱っているのもよい。一方で、212ページに家族の写真が載っているが、このような家庭が家族の象徴であるかのような印象を持ってしまうのではないかという意見が出た。また、加工食品などの写真があまり魅力的でないとの意見もあった。

続いて教図は、家族関係をよりよくする手立てがいろんな方法で紹介されている

ところや、乳幼児の写真が豊富でイメージしやすいところが評価できる。また、自然災害への備えを、物、コミュニケーション、室内、避難の4項目にまとめていること、自然災害への備えの内容が充実しているのもよいところだと感じた。

続いて開隆堂は、「ネウボラ」や「オレンジリボン」、「子ども食堂」、「熊本地震」といった新しい情報が入っており、良い。ただし、全体的に写真が暗く、魅力的でないという調査員からの報告があった。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(鎌田教育委員)

選定に当たっての推薦順と、どの程度、差がついているのか、教えてほしい。

(選定副委員長)

まずは、同じ料理の調理実習のページで比較した。まずは全体像が明るく映っているのが教図と東書だと思う。また、東書と開隆堂は調理手順を見出しで記している点のわかりやすい一方、教図では、食中毒の予防についての記載があるのは良い。全体的にみると調理実習の取扱いでは、教図が優れていると選定委員会では判断した。

次に、6つの基礎食品群と食品群別摂取量の目安について比較した。教図と開隆堂は、どのサイズで切ったら何gなのかの目安を視覚的にわかりやすく示してある。そのような点で比較して、検討を行った。

(八田教育委員)

他の単元での比較も、もう少し教えてほしい。

(選定副委員長)

「幼児の生活と家族」で比較する。東書はイラストが多く、写真が少なく小さく、総じて印象に残りづらい傾向がある。教図と開隆堂は写真が豊富である。ただ、教図はしょうまさん、こはるさんの2人の成長を並べて比べている構成になっているので、生徒には自身の思い出と重ね合わせやすいのではないかと考える。また、自然災害に関する学習に関する部分も比較する。物の備えについては3者とも触れているが、室内、避難、コミュニケーションと項目を明示してコンパクトにまとめているのが教図であり、生徒にとってわかりやすい。

(教育長)

ここまで質問してきたが、他に質問はないか。

では選定委員会として推薦する発行者はどこか、明示してもらいたい。

(選定副委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は教図である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、家庭について採択する。採択する教科書は、教図でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、家庭の教科書は教図とする。

続いて、英語について報告を求める。

(選定委員)

英語は、東書、開隆堂、三省堂、教出、光村、啓林館の6者について報告する。

まず東書だが、目次の内容が分かり易い。目標や文法内容が一目でわかり、内容が充実している。3年生の構成が「ラジオの災害情報」をテーマにした Listening の学習の後で、災害時の外国人支援を題材にした教材になっており、良い構成になっている。また、全体を通して、書き込んで学習しやすいようにレイアウトされているのが良い点だが、サイズが大きいため授業では使いづらいかもしれないという懸念もある。

続いて開隆堂は、各ページの左にタグのようなものがあり、このページで何をするのかわかりやすくなっている。また、歴史的なテーマだけでなく現代的で国際的な題材をモチーフにしている点もよいとして挙がっていた。一方2年生の構成が不定詞と動名詞がまとめられており、生徒には難しいのではないかという意見があった。

続いて三省堂は、各 lesson の扉ページに目的、ねらい、ポイントがすべて書かれており、学びのプロセスが見える点や、単元ごとの「文法のまとめ」のページがわかりやすいことなどが良い点である。一方、イラストが多く、視覚に訴えるものがアニメ的で、国際的な印象が薄いという意見があった。

続いて教出は、目次に文法項目事項とともに文法用語が記載されており、ふり返って学習する際に有効ではないかと思われる。また、3年生の最後に進路や職業をテーマにした教材があり、進路選択の時期に取り扱うには良いという意見もあった。一方、1年生のはじめごろに教科書への書き込み欄が多い点や、1年生、2年生の配列に課題があるという指摘がある。

続いて光村は、1年生の構成で、見開き部分にある子音字、母音字の一覧は他者にはない独自の教材でよい点である他、帯教材の「Let's Talk」は一問一答形式でわかりやすいという評価があった。一方、「Active Grammar」は文法のまとめにしてはポイントがわかりにくいなどの課題点が挙げられている。

最後に啓林館は、各 Unit の扉ページでテーマや目標がすぐにわかることや、2年生裏表紙の前にある前置詞のイメージがわかりやすいことなどが良い点であげられている。一方、会話の練習ができる教材が少ないほか、1年生の教科書では、小学校で学習する can を学習するタイミングが遅いなどの課題が指摘されている。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(森口教育長職務代理者)

どの教科書も学ぶ配列が、学びやすいようにスモールステップの学び方になっているか。

(選定委員)

どの発行者も、スモールステップを意識した単元設定となっているが、先ほど報告したように、配列には違いがある。

(教育長)

本年度から、阪南市では英語指導助手の人数を増やし、しかも、JET 青年の招致を行うことになっている。JET 青年との TT が行いやすいのはどの教科書も一緒か。

(選定委員)

どの発行者においても、教科担任一人でも授業を進めていけるように、工夫されており、特に、デジタル教材を活用して、どの場面でもネイティブな発音を確認することができるようになってきているので、特に優劣をつけることは難しい。ただ、ALT の配置が進めば、その場で繰り返し発音を聞くことができるほか、口の動きなども目の前で見ることができるため、有効と考える。

(辻教育委員)

2次元コードなどを利用して、リスニングができる教科書はどれか。

(選定委員)

すべての発行者において2次元コードを使用してリスニングを行うことができる。

(森口教育長職務代理者)

筆記体の書き方がそれぞれの教科書1年の最後のあたりに載っているが大体この程度なのか。社会に出た時に、サインはほぼ筆記体だと思うが。実際に筆記体で書く授業時間は、決まっているのか。

(選定委員)

平成14年度に施行された学習指導要領から、筆記体については生徒の学習負担にも配慮しながら指導することもできるとなり、必須指導事項ではなくなった。平成29年に告示された新学習指導要領解説においても、文字に対する興味付けともなり、有益であると考えられるが、生徒の学習負担を十分に考えてとされている。このこ

とから、筆記体については発展的な学習として取り扱うため、特に授業時間は決まっているものではない。

(鎌田教育委員)

選定委員会としては、6者の中で差はあるのか教えてもらいたい。

(選定委員)

東書、三省堂の上位2者と、開隆堂、教出、光村、啓林館の4者とでは差がある。

(鎌田教育委員)

上位2者の良いところを具体的に説明していただきたい。

(選定委員)

東書については、lessonのとびらにはそこまでは書かれてはいない一方で、目次の記載内容がとても分かりやすい。活動目標と文法について、何を学ぶのかが明確であるところがよいところである。三省堂については、各 lesson の「とびら」に目的、ねらいと学びのプロセスが全て書かれている。この点はわかりやすいと感じる。また、単元の流れとしては、東書の場合は、Read and Think の区別がついていること、Let's talk の内容が実生活ですぐ使えるものになっていること、Let's Listen 、Unit、Let's Talk と流れになっていて内容がまとまっている。三省堂では Take action! 、Use speak、Use Write の活用が段階的に説明されていて学習が進めやすい構成となっている。

(森口教育長職務代理者)

各発行者で、日常会話を頻出させたり、落語を教材に入れたり、構文を何回も繰り返し出したり、それぞれの教科書にテーマ性があると思う。上位の東書と三省堂ではどのようなテーマ性があるのか。

(選定委員)

東書は、内容解説資料によると、3つのポイントがある。一つ目は小中接続期の充実である。小学校の学びを生かし、丁寧に中学校の学びにつなぐために、入学からしばらくの単元を小学校で学んだ表現を使って「聞く」「話す」活動から授業に入っている。二つ目は Preview を新設である。目的・場面・状況に合う文法が使えるようになるため、中学校で進出の文法事項を、どう使うのかこの Preview で気づかせる導入としている。三つ目は「3段階読み」で対応、である。単元を貫く問いを示し、英語の見方・考え方を培うために、様々な問を用意し、子どもたちが英語で表現できるように設定されている。

三省堂については、内容解説資料によりますと6つの特長がある。1つめは各ページの役割を明確にし、学びのプロセスを見える化した教えやすさ・学びやすさ、2つ目は、小中連携を意識した単元の設定、3つ目は、レッスン構成が、知識・技能

を習得してから、思考力・判断力・表現力を育成するようになっていること。4 つ目は、5 領域のバランスに配慮した豊かな言語活動が用意されていること。5 つ目は、自然科学や環境、地域の文化などを扱う題材が扱われていること。6、7 つ目は、2 次元コードやユニバーサルデザインなど、子どもたちが主体的に学びを進めていけるよう工夫されていること。

(教育長)

東京書籍と三省堂どちらも持ち味があり、良いところがあるということだが、どちらの 1 位推薦となるか、両者が非常に僅差となっているように思う。学校からの推薦を見ると、三省堂のほうが上位となっている学校もあり、また、調査員の先生方も三省堂のほうを推薦している先生もあるが、この点の整理はどうか。

(選定委員)

調査員調査、学校調査ともに東書と三省堂が上位に来ているが、非常に僅差になっている。調査員は選定委員への直接報告する中で、三省堂については「单元ごとの文法のまとめのページがわかりやすい。」「各 Lesson の POINT (基本文や重要文) がわかりやすく表記されている。」「巻末付録が充実している。会話表現やロールプレイでの具体的な表現など、本文内容と対応していて使いやすい。」と評価していた。一方、東書は、「各学年の目次がわかりやすく、目標、文法内容がひとめでわかる。」「内容はまんべんなく取り扱われており、バランスが良い。」「Let's talk の内容が実生活ですぐ使えるものになっている。」と評価しており、「内容は一番充実している。」と高く評価していた。ただ、教科書が大きいことで、三省堂よりも推薦順を下にしていた。

この点は、調査員と選定委員の中で、かなりやり取りを行った。東書は版が大きく、書き込むところが多いが、プリントなども活用するため、三省堂のように特に書き込む欄が少なくても支障がないということや、版が大きいということは、授業中だけでなく、カバンのサイズなどにもかかわってきてしまうため、東書を 2 番目にしたということだった。しかし、調査員も非常に悩んでおり、東書のサイズが小さければ東書が 1 番目だったという話や、生徒や教員が慣れていないだけで、版が大きいことで支障はないのかもしれないという話もあった。選定委員会からは、東書が三省堂より推薦が下になる理由が、版が大きいということであれば、もしかすると選定委員会としては東書を推薦するかもしれないということを調査員に確認済みである。それを踏まえ、その後の選定委員会で話し合ったときにも大きな議論となり、選定委員の間でも意見が割れた。例えば「内容は東書の方が良いと言いながら、版の大きさに 2 番目にするという事はそれだけ使いにくいと考えているからではないか」、や、「逆に英語だけが大きいのであれば、他教科との違いがあつてよい

のではないか」、「大きいと言っても縦だけで横幅は同じ、小学校の教科書と同じサイズである。書写のように見本にするのなら扱いにくいかもしれないが、どれだけマイナスになるのか」などの意見が出た。

最終的には、内容は東書が1番良いということは調査員も報告しており、版が大きいことだけがマイナス要素であるということから、東書を1番に推薦するという事になった。

(教育長)

東書の大きさは今回の採択から大きくなったのか。

(選定委員)

今回の採択からである。

(教育長)

相当に白熱した議論がなされたと思う。内容として、東書を一番に推薦するのか。

(選定委員)

選定委員会として、東書を一番に推薦する。続いて三省堂、の順と考えている。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、英語について採択する。採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、英語の教科書は東書とする。

続いて、道徳について報告を求める。

(選定委員長)

道徳は、東書、教出、光村、日文、学研、あかつき、日科の7者について報告する。

東書は、3年間とおして、いじめや命について考える教材が充実しているのは良いところと思えるが、一方で定番教材が少なくなっていることや、いじめについて学ぶ教材で載っているイラストが中学生にあっていない、といった指摘があった。

続いて教出は、考えさせることに特化した内容であり、意見を出しやすいように選択肢があることで生徒が授業に参加しやすいという意見があった。また、いじめ、情報モラル、性的マイノリティの教材が特集されていることもよい点である

続いて光村は、国語科との関連が深く、読み応えのある作品が多い、という指摘が調査員からあった。これは長所でもあり、生徒にとっては苦手意識を生徒が持ちそうだという意見があった。

続いて日文は、内容が充実しており、また、道徳ノートについては現在中学校で使用しているものよりも、自由度が増しているが、実際の授業では、教員がそれぞれワークシート等を用いていることが多いとのことである。また、考えさせるところが少ないという課題点もある。

続いて学研は、教材の配置のバランスが良いという意見があった。また、タイトル下の見出しが興味を引くという評価もある。しかし、その見出しにより、学習で深める前に生徒が答えを用意してしまうのではないかという意見もあった。

続いてあかつきは、文字の大きさが各学年にあわせて配慮されているのは良い点だが、一つ一つの話が長く、考え、話し合う質問が多く、補助教材も多いため、情報量が多すぎるという課題点が挙がっていた。

最後に日科は、LGBTに関連した教材があることや、「考え話し合ってみよう　そして深めよう」の問いが多くても3つまでにおさまり、発問の工夫などの自由度が高いことが良い点である。一方、1年生の教科書の文字が小さいことや、各教材が右ページで始まるよう統一されていないことが使いづらい、という課題点があった。
(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(辻教育委員)

良い教材が取り上げられていると評価できる教科書はどれか。そこに差はあるか。

(選定委員長)

調査員からは、一部発達段階にあわない教材やイラスト、挿絵等の課題点などが指摘されているが、各者それぞれに特徴のある良い教材があると報告を受けている。全体のバランスで、内容が充実しているとの報告を受けているのは、教出、日文、学研の3者である。

(八田教育委員)

SNSなどの正しい使い方を学ぶ上で評価が高いのはどの教科書か。

(選定委員長)

情報モラルに関する教材の取扱いが多いのは、日文、あかつきで、次いで学研、教出となる。内容に関しては教出と日文が充実していると思う。どちらも各学年にSNSに係る教材があり、中学生にもわかりやすく、日常生活で起こりえる内容が掲載されていると思われる。

(教育長)

情報モラルは、非常に考えさせたいテーマである。

(辻教育委員)

巻末の「学びのふり返し」のようなものが多いが、使いやすさ

で評価は分かれるのか。

(選定委員長)

特にその点に特化した報告は受けていないが、現行教科書の日文の道徳ノートは、使いやすい場面と使いにくい場面があり、結局教員がプリント等を用意する必要があったと聞いている。各者の「学びの振り返り」も同様に、特に評価の分かれるポイントではないと考えている。

(辻教育委員)

7者の中に、差はないのか。

(選定委員長)

教出、学研の2者の差があまりない。少し開いて日文。残り4者は上位3者と差がある。道徳に関しては「考え、議論する道徳」「主体的・対話的で深い学び」といったキーワードが重要である。また、いじめに関する教材が充実していることも大切である。わかりやすく、考えやすく、意見を出しやすい教科書を選定していく中で推薦する発行者を選んでいくことが大切だと考える。この点で、教出では、各学年、いじめに関する直接的、間接的な教材がユニットとなっており、いじめを許さないという教材として扱われている。1年生の「携帯」「いじり」をテーマにしたもの、2年生の「いじめの傍観者」について、3年生の「見た目」によるいじめ教材が良い。日文もユニットになっており、体系的にいじめについて向き合うことができる教科書と言える。

(森口教育長職務代理者)

教出と学研の2者について、教材に関して、それぞれの評価をもう一度、聞かせて欲しい。

(選定委員長)

教出は、意見を出しやすいように、選択肢を提示するなどの工夫がされており、子どもたちが考えやすいように工夫されているほか、教材も成長段階に合わせられており、漫画やイラストを利用して、わかりやすく、取り組みやすいように工夫されている。また、いじめについての内容が充実しており、自然や環境をテーマにした題材も充実している。また、情報モラル、性的マイノリティ、防災など近年取り組むべき内容が特集されているのも評価されている。ただ、教材名の下の部分に何について考えるのかが示されており、答えを用意する生徒が出てくるかもしれない点や、補助教材のなかで左ページから始まるものがあるという点も若干、課題として挙がっている。

学研は全教材が右ページ始まりとなっており、生徒が授業中に他の教材に目移りしない構成になっている点や、ユニット学習として複数の教材を通して学び、多面

的・多角的な学習ができるように考えられているなど、教材の配置のバランスが良い点が評価されている。また、写真やイラストがバリエーション豊富で生徒の興味をひくのも良い点である。ただ、教科書の大きさが横に広いため、教科書全体を目でとらえにくいのではないかという意見も出されている。また、教出と同じく、教材名の下の部分に見出しにあたる言葉がある。興味を引くかもしれないが、授業で考えを深める前に答えを用意してしまうかもしれないとの意見もある。

(教育長)

では、選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会としては、教出を一番に推薦し、続いて学研の順と考える。

(教育長)

教科化となり、現場には経験の浅い先生方が入ってきたという現状はある。教出の教科書の中で、選択肢を提示することが評価されていたが、道徳という教科は、自分で選んでいくもので選択肢を提示するものではないと個人的には思っている。道徳の教科書選びも、毎回、先生方の意見がばらばらになり、学校評価をみると、評価のばらつきがとても大きくなっている。それぞれの教科書に個性があり、好みにより、推薦順位の幅が大きくなっているように見える。1位推薦の教出であるが、学校調査を見ると、複数校で順位が低い評価の学校が見られる。このところの評価の低い学校があるところをどう理解したらよいのか聞かせてほしい。

(選定委員長)

学校の評価では、教出と学研が高い評価の学校と低い評価の学校があり、日文はほぼ中間の評価だった。この点については、選定委員会でも議論になった。教出は新しい教材が多くあり、ディベート形式や一つの答えを導き出すようなものではないものも含まれているなど、新しいものに挑戦しているという捉えもできるという意見や、これまでの良いと言われている読み物教材が少ないとの意見もあったが、最終的には、深く考え議論する道徳をめざすためには、生徒自身がわかりやすく、考えやすいものが望ましいという判断から教出を一番に推薦することとなった。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、道徳について採択する。採択する教科書は、教出でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、道徳の教科書は教出とする。

○採択の確認

(教育長)

さて、ここまでひととおり、選定委員会からの各教科の報告を受け、それぞれの種目において採択をしてきた。ここで最終、もう一度、採択した教科書について、確認を行う。

阪南市教育委員会として、令和3年度に使用する中学校教科用図書は、国語 三省堂、書写 三省堂、社会（地理的分野） 東京書籍、社会（歴史的分野） 帝国書院、社会（公民的分野） 東京書籍、地図 帝国書院、数学 数研出版、理科 東京書籍、音楽一般 教育芸術社、音楽器楽 教育芸術社、美術 光村図書出版、保健体育 学研教育みらい、技術 東京書籍、家庭 教育図書出版、外国語（英語） 東京書籍、道徳 教育出版。

以上、16種目について、以上のように採択を決定したいと思うが、どうか。

お諮りする。異議はないか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認める。令和3年度使用中学校教科用図書は、以上のように決定する。

○小学校教科書の採択

(教育長)

では、次に令和3年度に小学校で使用する教科書について採択する。

お手元の別紙1を見てほしい。小学校の令和3年度使用教科用図書については、平成31年度採択における調査研究の内容を踏まえ、別紙1の通り、平成31年度採択のものと同一ものを採択したいと思うが、よろしいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認める。

小学校の令和3年度使用教科用図書については、別紙1の通り、平成31年度採択のものと同一ものを採択することとする。

◆議決事項第2号「その他について」(学校教育課)

(教育長)

それでは、議案の2に移る。

「その他」で、何か議決を必要とするものはないか。

(全委員)

なし。

(教育長)

ないようなので、これをもって、第3回臨時教育委員会を閉会する。

以上